

氏 名：濱田 真由美

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第55号

学位授与年月日：平成26年 3月14日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：授乳支援をおこなう助産師の経験

Experiences of Midwives Who Support Breastfeeding
Mothers

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 谷 津 裕 子（正研究指導教員）

副査 守 田 美奈子（副研究指導教員）

副査 高 田 早 苗

副査 佐々木 幾 美

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

現在、母乳育児は母親にとっても児にとっても最も良い栄養方法であると世界的に位置づけられ、「母乳育児成功のための10カ条」（WHO/UNICEF 共同声明，1989）を基に母乳育児推進運動がおこなわれている。先行研究では、母乳育児できなかった場合に母親は自らのアイデンティティが揺るがされることや、母乳育児を支援する助産師と母親の間には緊張が生じやすいこと、時間的・組織的な制約により助産師は必ずしも質の高い授乳支援をおこなえない状況にあることなど、母乳育児をめぐる授乳支援には様々な問題が存在することが明らかにされている。しかし、日本では授乳支援に携わる助産師がどのような状況の中で、何をどのように認識して母子に関わっているのかについて探究した先行研究はない。そこで、授乳支援をおこなう助産師がどのような経験をしているかを明らかにすることは、授乳支援にともなって生じる問題の深層に迫るうえで有用であると思われた。

【研究目的】

授乳支援をおこなう助産師の経験を明らかにすること。

【研究方法】

質的記述的研究デザイン。研究参加者は関東圏内の地域周産期母子医療センター2施設に勤務する助産師6名（助産師経験1年未満の新人助産師と管理職者は含めない）であった。データ収集は、半構成的面接法（1回あたり約1時間、1名につき2回ずつ）と授乳支援場面の参加観察法（1名につき1～2回）によっておこなった。データ分析では、研究参加者1名毎に面接データの逐語録と参加観察で得たフィールドノーツを繰り返し読み、助産師がおこなう授乳支援の経験（感情や価値観などの内面的変化や知識や技術、態度に関する認識）について語られた文脈に着目し、各研究参加者のデータをコード化、カテゴリー化した。その後、カテゴリー間の相違性と

共通性を比較し、授乳支援をおこなう助産師の経験を表すテーマを見出した。Lincoln & Guba(1985) が提唱する自然主義的研究における真実性 (Trustworthiness) の 4 つの規準に則り、データ分析結果の妥当性を確保した。

【倫理的配慮】

日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会 (No. 2012-73) と研究協力施設の倫理審査会 (No. 1301) の承認を受けて研究を実施した。研究協力施設の産婦人科師長に研究の趣旨と概要を文書と口頭で説明し、協力を得た後、研究参加者の条件に合う助産師に対して研究者が個別に研究参加を依頼した。入院中の母親に対しては、産婦人科師長の承諾が得られた場合に病棟にポスターを掲示して研究について告知すると共に、参加観察の際には研究者の身分や研究の目的・方法を個別に説明し、了承を得てから実施した。

【結果】

1) 研究参加者の概要

研究参加者は、20 歳代後半から 40 歳代前半の助産師 A・B・C・D・E・F 氏であった。臨床経験年数は平均 9.0 ± 6.0 年 (うち助産師歴 5.3 ± 3.1 年) であった。

2) 授乳支援をおこなう助産師の経験

(1) 授乳支援に対する信念が揺れ動く

授乳支援に携わるなかで研究参加者は、母乳育児からの‘逃げ道’として人工乳が使用されている実態や、母乳育児推進に熱心なあまりに母子に介入し過ぎる授乳支援の実際、母乳育児が確立するまでに母親が体験する疲労や苦痛などを目の当たりにした。Baby Friendly Hospital における授乳支援方法を実習施設や勤務施設で学ぶ過程で、堅く信じるようになっていた‘母乳育児を推進することが助産師の役目’という考えは、臨床の現実を知る過程で揺らぎ始め、研究参加者は自らの授乳支援に対する信念に疑念を抱くようになっていた。

(2) 授乳支援に不確かさや迷いがつきまとう

研究参加者は、母乳哺育の子どもに人工乳を補足的に飲ませる基準や方法など、授乳支援を展開するために必要となる知識や判断の科学的根拠の乏しさを感じ、自らの授乳支援に不確かさや迷いを抱えていた。授乳支援の手がかりとなる明確な規準や解決法を先輩助産師の実践や母乳育児関連の講習会、インターネット上の情報等に求めても入手することは容易ではなく、施設の新児科医が定めたルールに従って授乳支援の方向性が規定されている現実があることを感じ取っていた。

(3) 母親の実情に沿い、かつ母子の利益が最大になる授乳支援を開拓する

研究参加者は、人工乳を極力用いない母乳育児支援は母親の身体的・精神的ストレスを増大させてしまうだけでなく、かえって母乳育児したいと思う母親の気持ちを萎えさせ母乳育児継続を困難にさせる結果を招くことを、実践を通して学んでいた。そこで、母親に対しては母乳育児を強く勧めたい気持ちに歯止めをかけ、母親にストレスを与えない支援方法に変更したり、母親の主体性と意思決定を支える支援を心がけたりする一方で、医療者に対しては新生児科スタッフと産科スタッフの授乳支援方針の食い違いを是正することによって、母子にもたらされる利益を高めようと努めていた。

(4) 授乳支援の難しさの中から母親との隔たりを埋める手がかりを感じ取る

産前から産後にかけて母親の心身の状態が目まぐるしく変化するなかで、研究参加者は、母乳

育児に対して漠然とした希望をもち明確な意思をもたない母親、助産師に容易に心を開かない経産婦に対して関わることに困難さを感じるとともに、母親になったことのない助産師が「母親」の存在を理解して授乳を支援することには限界があると認識していた。しかし、曖昧で捉えどころのない母親の姿こそ真の母親の姿であると考え方を転換し、母親自身の感覚や思いを尊重して関わることによって、母親との隔たりを埋める手がかりを感じ取っていた。

(5) 組織の円滑な運営のために個人的な不満や見解は差し控える

研究参加者は、それぞれに母子にとって利益となる授乳支援のあり方を模索していたが、時間的余裕がないことや同僚と異なる意見を交わし合う場がないこと、小児科医との摩擦、看護職者が大切にされない環境といった問題に阻まれ、思うように授乳支援の方法を改善できない状況に置かれていた。しかし、そうした不満や疑問を表出することは、組織において医師や同僚との人間関係や円滑な業務を阻害する恐れがあるため、差し控えていた。

【考察】

1) 母親の現実に寄り添う授乳支援の再構築

授乳支援の現実を知る過程で助産師は、実習や勤務を通して培ってきた母乳育児支援に対する信念を自問する必要性に迫られ、母親の現実に寄り添うことの大切さを身をもって学んでいた。授乳支援が母親の生活に適したものとなり、母子にとって利益が最大になるためには、助産師自身がもつ価値観を批判的に問い直し、母親に対して公平で多様な情報を提供することが大切であると考えられた。

2) 授乳支援の創造に必要な組織のあり方

母親の現実に即した授乳支援方法を創り出す過程では、助産師自身の経験に対する内省や授乳支援への批判的な反省のみならず、職種や部門、先輩後輩の垣根を越えた多様な人々との対話が重要な契機となると考えられた。授乳支援に携わる医療者が実践を通じた学びや気づきを自由に表出し、互いの視点を理解し合って、母子の利益となる授乳支援の実現に向けて変化し続けることのできる組織作りに努めることの必要性が示唆された。

3) 授乳支援の新たな展開を拓く助産師を支える体制

助産師が母子の実情に即して編み出した授乳方法の中には、WHOやUNICEFが提唱する母乳育児支援方法にとらわれないものも含まれていた。科学的な観点から軽視・排除されがちなこうした実践の知識を、母親の多様性を考慮した豊かな知識として蓄積していくことの必要性が示唆された。また、母乳育児支援に熱心な助産師と距離を置く母親との間にある隔たりは、母乳育児推進に対する批判的吟味が十分とはいえない助産師教育に一因があると考えられた。そのため、助産師教育においては、授乳する母親の多様な生活や価値観に根ざした授乳支援の必要性とその具体的方法を教授することが重要であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、授乳支援をおこなう助産師の経験を当事者の語りを通して明らかにした研究である。母乳育児推進を標榜する授乳支援に伴う問題の詳細を、日本の母親の実情を反映するかたちで明らかにした点は意義がある。日本で実施された授乳支援に関する先行研究は母乳育児推

進を前提としたものが多数を占める中で、そうした前提には立たずに助産師の経験そのものに着目し、授乳支援の問題の深層に接近した点にもオリジナリティが認められる。

授乳支援をおこなう助産師の経験には、現代社会に生きる母親の価値観やライフスタイル、母子を取り巻く環境の多様性と複雑性が色濃く反映されていた。また、助産師が他職種や他部門、同僚との関係性を築きつつ、授乳支援を通じて母子の利益を追究するという複雑な課題に取り組む様子もリアルに描き出されていた。そうした課題は、助産師が実習や勤務を通して習得してきた母乳育児推進を前提とする知識や価値観だけでは解決できるものではないことを、本研究を通して根拠をもって示唆し、今後の助産師教育の方向性を提言したことは評価できる。また、母乳育児推進の根拠とされる科学的知識や方法にとらわれない授乳支援が母子の利益に結びつくという現実や、そうした現実が専門家としての価値観に自己吟味を促し授乳支援の前進へとつながり得ることを具体的に示した点も興味深い。本研究で得られた結果は、授乳支援場面にとどまらず看護一般に見受けられる実践知の進化のありようを示唆するものであり、看護学・助産学の知の構築の観点からも今後研究の発展が期待される。

博士学位論文審査専門委員会では、申請者に対して質疑応答を行い、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。